第３章　四万十の地域資源地図

大正百周年田野々物語

田野々の町並と予土線 40 年記念列車（2014 年）

大正町田野々。ぼくの人生の中で四半世紀に渡り住んできた思い入れのある町だ。この町で結婚して子どもが生まれ、家族ができた町でもある。

四万十川と梼原川の合流する河岸段丘。高校のある森駄場を中心に丸く環を描く地形が好きだ。熊野神社の森の神秘さが好きだ。轟公園の開放感が好きだ。梼原川の河原が好きだ。いっぱい思い出がありすぎて、過ぎ去ったあんなことこんなこと、幼い頃の娘たちと過ごした日々。いろんな思い出があふれる。

かつて田野々は林業で大いに栄え、製材業はじめ、木材関連産業が活発で、軒並み赤字の高知営林局管内において大正営林署は魚梁瀬営林署と肩を並べる黒字を生み出していた。町の中も飲み屋、旅館、たくさんの商店が並び、夜になると下駄の音を響かせながら人々が闊歩していた。神祭も賑やかで、熊野神社の大祭には大勢の人が集まり、賑やかな音色で溢れ、各家をわいわいと飲み歩くそんな風習も根強く受け継がれていたことを思い出す。飲み会といえば二次会はチャップリンと決まっていた。田野々の老若男女が集まり、ママのしずさん、マスターのタカさんが酔客を心地よく包んでくれていた。

住んでいた本町の常会では毎年四万十川駅伝に「本町風の子会」を結成して出場し、レース後の打ち上げや、新春恒例の春祈祷の二次会。自分の結婚式の二次会もチャップリンだったなぁ。本町のみなさんや友人とはしゃいだことがつい昨日の晩のように思い出す。

昔、朝早くからランニングを習慣としていた時期がある。ある夏の日の早朝、轟崎の大椎の木のところで見たこともない動物が車に撥ねられ死んでいた。あれはカワウソではないだろうかと今でも思い出す。このことも忘れられないエピソード。四万十川最後のカワウソだったのかもしれない。写真を撮れなかったことが未だに残念でならない。

鮎やウナギ、テナガエビ、川の恵みも豊かなまま、穏やかに流れ続けてもらいたい。年々歳々、時が流れ、変わらないと思っていたものも知らず知らずのうちに移ろってゆく。

振り返ってはじめてわかることもある。役場が四万十町に合併され、営林署が統廃合してなくなり、それに伴って商店、公共機関もみるみる縮小し、人口も減少した。保育園、幼稚園、小学校、中学校も子どもたちの減少に歯止めがかからない。どこの自治体でも地域でも起こっている現実問題。次の 100 年の後にはこの町はどうなっているのだろうか。

賑やかだった大正町田野々の地名も地図から消えて久しい。田野々はすっかり声をひそめて、なにを待っているのか。どこに行こうとするのか。しかし、いつもいつの時でも、たとえ大正を遠く離れても、ぼくはこの町で過ごしたことを決して忘れはしない。

（森下嘉晴）

大正百周年
田野々物語
祝
次の100年へ！
急峻な山々がいくつも重なる地形が長い間人々の仕事や歴史の流れ、伝統の制定とほぼ一致した上山郷。
厳しくも豊かな自然、環境の中で助け合い、自然と共生し、産業を活かして暮らしている。
エンコウとすもうをとった民話が多数残っている
桃原川はかつて淀野山川と呼ばれていた
四万十川
お前の川原
上山郷は「上山山分」と呼ばれ、四方を山に囲まれ、山を越し、谷を渡り、川をまたぐ、とても交通の便がよくなかった。
1922年、宮川・寺和村間道路が開通するまで、宮川・田野々間の二車線、全面舗装。
1979年、国道321号線になる。
1989年、宮川・田野々間、二車線、全面舗装。
義倉
江戸時代、上・下の田野々村庄屋屋敷には義倉が設置されていた。
凶作、飢饉を上郷村で、比較的豊かな農民たちとおなじく救済していた。
馬引地蔵のおまつり
忠魂塔のおまつり
四万十の船に大正の猫耳
石鎚神社
上山城（田野々城・土居城城）跡
河内神社
江戸時代、このラインで上田野々村・下田野々村に分割されていた。
民俗資料館（田野々村）
長命地蔵
五松寺
こども園
大正橋
西本町
本町
中町
東山
工作大正駅
大正中学校
森駅場
新町
駅
海津見神社
田野々小学校
七夕神社（原町）
庶民の住居
熊野神社
熊野神社の銀杏の森の大木を目の前に見ることができる。
周囲と一体となった すばらしい石橋。
車・人をつかってゆっくりとみたい。
大正記念
金剛寺の森
町中であり、かつ大型と成っている。
でっぱいパワースポット。
ムクノキも生いしげる。
田野々の大火
昭和23年3月6日（土）桃原川沿いにあった大正製材所修理工場から出火した。強い北からの風にあおられて、10時間にわたり火災をひきおこす。田野々の町の半分以上を焼失した。
190戸 全焼、受災者1300人。
「田野々全焼」と伝えられた。
その後、復興をとげていく。
桜並木
茶瀬
舟渡し場
葛籠川と仁井田川の合流するところ。下に流れたので、急流。茶瀬が多い。川は広がり、浅い。
大正9年、郵便馬車が走り、ウロウロ。熊野神社と長泉寺を結ぶ橋を作ったが、昭和13年、洪水で流失。渡し船が復活。
渡し船から 沈下橋へ 沈下橋から 拓永橋へ
長崎苗圃園跡
大正営林署が、苗木を育てるために、スギの種を採っていた。桃原村の名ものの。
古民家 門脇家住宅
郷土資料館
公園
世界一の石の灯籠。大きい方が、回れる。
河内神社
ヤマロウ センター
長崎
四万十川（下流部は「淀野川」と呼ばれる）
道の駅 であいの里
ナガツボ神社
村3里へ
一の又温泉 市ノ瀬景観（根上がり工事）
2014.3
カワウソ
カワウソの足あとを探してみよう。
田野々の町中は、平坦に、長方形の碁盤目状に区画されている。
また、上流にある桃原川の田野々から神社の土地が流れ着いたので、同じ名前の田野々になったという説もある。
タヌキ
タヌキの足あとを探してみよう。
荷車にたった庶民の暮らし
上流域では、農業が、盛んであり、農民からより多くの税をとる重税政策。
特産品の生産を強いられていた。
衣類は、自作の木綿が主。フジの皮などから、タヘ布（ぬの）を織っていた。
また、仙花紙を原料として、紙の布団や衣類、蚊帳として使っていた。
食べものは、野菜と、ほぼ、自給にならず、ますます、タイなどを少量のまとめて食べ、カシワなどの肉も食料として、飼育していた。
塩は、江戸時代、10の塩師のもとに3人、魚類は、干物などを担ぎ、ほぼ、交換していた。
リバーパーク キャンプ場
四万十ヒノキ 集成材工場
交通安全講習場

志和今昔

志和地区の郷分集落

志和へ向かう峠から青黒いように光る美しい2月の海を初めて見たのはまだ20歳そこそこのことだった。あの時の海の広さと青い色は何十年たった今でも鮮明に覚えている。

志和。しあわせの里。厄除けに御利益のある日和佐の薬王寺と深い縁がある薬師寺を中心に広がる穏やかな海沿いの集落だ。この絵地図は窪川見付　古渓城城主　林一将さんが製作を勧めてくれて取り組んだものである。

林さんは郷土史家。古渓城には文化財級の資料がところ狭しと並んでいる。林さんには数々の窪川にまつわる伝説や史跡を教えてもらい、窪川の歴史の師でもある。絵地図「たんね歩記」の隅っこに押印している「も」の印は何を隠そう林さんに頂いた宝物である。

志和について師より数々の伝説を教えてもらうなかで、最も衝撃だったのが白鳳地震により志和の沖にあった黒田郷が海底に沈没したことであり、その時の名残が志和の各地に残っていること。志和を歩いたのが折しも東日本大震災が起こったすぐあとのことだったので、白鳳地震が現実味を帯びて感じられ，自然の持つ巨大な力に畏怖したことを思い出す。

この絵地図に記したように、志和には槿花神社のお万様をはじめ、仁井田五人衆の一人、志和氏一族にまつわるさまざまな伝説や物語が濃縮されている。また、年貢米の集積地やブリ大敷網など土佐の産業史の中にも濃い影響を与えた土地だ。明治の時代に久礼坂が開通するまでは窪川～見附～東又～志和のルートが主要な交易道であり、お伊勢参りに行く人たちもこの道を歩いて行ったという。それはそれは栄えた港町であったことだろうと当時を偲んでみる。

志和の人々の心の拠り所であり、誇りである薬師寺。厳かな風情に包まれた山と海が融合するような神秘的な雰囲気を持つ名刹。松葉川下栗のお薬師さまは、午後には志和のお薬師さまの元へ訪ねてくるので午前中にお参りをしなければならないという逸話もある。そういえば四十二の厄祓いをしていただいたことも思い出す。

志和で毎年行われているひな人形の展示（2013 年）

どこをとっても魅力的な志和を訪ね歩く中で、特に印象深かったのが小鶴津から大鶴津を歩いたこと。目もく

歴史とロマンの里
志和今昔
監修 林一将
白鳳地震記
白鳳年間の684年、大地震によって志和の沖合にあった黒田の郡とよぶ大きな島が海中深く沈んだという。
島の大きさは東は野見から西は興津沖までであったといわれる。
志和の磯はこの島の山のなごりである。
大鶴津沖は「午置あぜなし」といわれ岩一つない一面の泥で、水田の跡である。
志和今昔
藩政期から高南台地の年貢米の集積地として高知城下への積出港。また生活物資の揚げ地として栄え、蔵と構えた商家軒元、旅館等で賑わった。
さらに、船頭や船大工も多く造船や航海技術に長じた重要な地であった。
明治に入り、スれ坂開通により、ますます車の時代となる。
●年貢米は1700石も集まっていた。
●ちなみに土佐藩は六公四民
志和しあわせの里
至久礼
天井賀
通玄院
窪川山内家が用いた天井賀の地
藩の分一役が主屋として使用
米蔵跡
天井賀の港
五社の神役はここで心身を清めて大祭に臨んだ
志和磯
珊瑚城伝説
仁井田郷の年貢米を城下へ運んだ塩屋の船。
明治～大正期 鮪大敷網漁で大いに栄える
文禄の役に長曽我部元親の命令により、この地より仁井田五人衆が出陣した
(志和氏も城主宗光、氏村に参戦、船頭はじめ百名位出陣)
志和屯台跡(お台場跡)
火立場跡
(南境山)
敵や黒船が近づいた際にのろしをあげて城下まで報らせていた。
大鶴津6km 軽トラでもギリギリ。
潮音
諏訪神社(1300年の歴史)
祭神神体は白鳳地震で沈んだ黒田郡より流れつき、ここに祀られる。
毎年10月28日の大祭には黒田郡の霊を慰めている。
昔はオンベ踊りも志和の磯の海上で踊っていた。
勧請は白鳳13年10月(685年)
中土佐町
四万十町
昔は磯海岸
尼寺
隠海庵があった(数と三勢時がひそんでいた)
水門
船頭塚
海上漁業安全地鎮護
漁師
薬師堂
旧暦2月1日春の大祭
薬師寺
恵心作 薬師如来座像
鮮魚
中延
工藤湯屋
塩屋
はたご
貝ボタン工場
JA
山門
明治5年～1926年までは薬師寺が多目屋っ尋常小学校となっていた。(ちなみに、修業年は4年)
千鳥学院が昭和2年できる。ちどり保育園 ↑園になる。(平成19年3月)
天神宮
天満大神
志和小学校
H23年閉校
明治10年米倉が志和校になる。
昔ながらの石垣
500俵も貯蔵ある塩屋所有の米倉だった。
紺屋
喫茶 なごみ
美しく咲いて一日でしぼむ、むくげの花にお万さまの短く儚い一生と偲んで名付けられた。
天満宮
槿花神社
お万さま
城主則延の娘で才色兼備。窪川、西原城へ嫁ぐ。嫁入いつも志和川で顔を洗い始め更、谷の大蛇に見込まれ、蛇に化身し四万十川に消えお万さまを今天神として祀る。命日は1527年3月22日。
志和城跡
志和を領主志和氏の山城跡1592年元親に攻められ落城。
絶世の美女ゆえ数奇な運命をたどる。
黒石阿弥陀堂にも伝説案内板あり。
志和の海が眼前に広がる
早春の凛とした空と海が志和の里にはよく似合う
志和坂
志和勘助
城主宗光の弟。朝鮮の役で大弓を引き、加藤清正をおどろかせた武士。
橋
志和坂下の大師堂。
志和城落城とともに切腹した与津地殿臣団七名の壮烈、殉忠の地
資料ご協力
於母衣 M.Y.さん「志和二千年」
観光協会C.J.さん 高知新聞
旧往還道(通行可)
志和峠神社
小鶴津
古代地震の痕跡
山野上氏について
志和氏家臣だったが志和の落城後は山内氏にとりたてられ大商人となった「塩屋系」と、恵ヶ瀬細田として大きな野望をもち[illegible]として江戸時代に活躍した。
天満宮御神事
古工ルート
5000万年前の断層。
シュウド・タキライト(断崖、絶対に注意して!!)
小鶴津
ヒショウヶ谷
400年位前の中世の城主屋敷跡
つるぎ「天満宮」(ぶの海奇納)
とび剣
城主の下僕が刀を造る金がなく鍛冶屋に「一振につき薪一束」の約束で、千日かけて一振の小刀が造られた。下僕の心がこもったこの小刀は、下僕を化物から守るため腰から飛び出し戦ったという伝説が伝わる。
蛇姫伝説
とび剣伝説
轟の滝
本とどう
大鶴津
男滝
轟の滝
女滝
滝の上の地は変動チチ…
至興津
冠山

無住となった小鶴津集落（2014 年）

無住となった大鶴津集落（2014 年）

らむような断崖があり、鄙びた漁村風景があり、そして美しい海が広がっていた。大鶴津の浜辺で穏やかな土佐湾を眺めながら時間を忘れてしばらく佇むことができた甘やかな時間はいつまでたっても余韻の波のように思い出す。

1980 年代、かつてこの地に原子力発電所建設をめぐって窪川が大きく揺れたことがあった。チェルノブイリしかり。福島原発しかり。ようこそ原子力発電所設置に反対して、建設を阻止してくれたと当時の人々の英断と決断に感謝をする思いだ。もう原発はいらない。

この美しい土佐湾。幸せの里志和がいつまでも穏やかな幸せにあふれ、歴史とロマンを優しく包み込む志和であり続けてもらいたいと切に願う。

（森下嘉晴）